

中国社会科学学会 2011年度大会

会場：東京大学文学部1番・2番大教室（法文2号館2階）

主催：中国社会科学学会 Fax: 03-5841-3744, E-mail: shabun@hyper.ocn.ne.jp

参加費（資料代）1000円 非会員の来聴歓迎

2011年7月9日（土） 自由論題報告

セッション1 15:00~17:00 一番大教室

司会：長谷部 英一（横浜国立大学）

朱載堉の律暦合一思想 田中 有紀（東京大学大学院）

コメンテーター：森 由利亜（早稲田大学）

宋代における三国論の展開と背景について 田中 靖彦（恵泉女学園大学）

コメンテーター：渡邊 義浩（大東文化大学）

セッション2 14:00~15:40 二番大教室

司会：茂木 敏夫（東京女子大学）

義和団事件後の清朝対日謝罪使の訪日——日本における活動とその意義を中心に

..... 青山 治世（日本学術振興会特別研究員PD）

清末における新式教育の発展と伝統士人

..... 周 東怡（東京大学大学院）

コメンテーター：川尻 文彦（愛知県立大学）

セッション3 15:45~17:25 二番大教室

司会：尾崎 文昭（東京大学）

左連研究の現代的意義

..... 阿部 幹雄（中央大学）

コメンテーター：長堀 祐造（慶応大学）

戦後台湾における「山地」行政の政治施策——対原住民政策の中核方針 .. 松岡 格（早稲田大学）

コメンテーター：吉澤 誠一郎（東京大学）

会員総会 17:30~18:00 一番大教室

2011年7月10日（日）

シンポジウム 都城の変貌：東アジアの9世紀~15世紀

午前の部 中国大陸—北の都・南の都— 10:00~12:00

報告1 金の中都から元の大都へ 渡辺 健哉（東北大学）

報告2 南宋臨安の社会と空間 高橋 弘臣（愛媛大学）

ディスカッサント：小島 毅（東京大学）

午後の部 ベトナム・朝鮮・日本—異なる都・交わる歴史— 13:30~16:25

報告3 18世紀以前のホアンキエム微高地 桜井 由躬雄（京都大学）

報告4 高麗王朝の儀礼と開京 豊島 悠果（神田外語大学）

報告5 平安京における人的ネットワークの展開 京楽 真帆子（滋賀県立大学）

ディスカッサント：金 文京（京都大学）

総合司会：妹尾 達彦（中央大学）

全体討論 東アジア都城の比較から何が見えてくるのか？ 16:25~17:25

◇朱載堉の律暦合一思想

田中 有紀

【報告要旨】 十二平均律の発明で知られる明の朱載堉(1536-1611)は、大統暦の誤差の指摘、天文緯度測量に関する新法の提唱など、暦学でも多く業績を持つ。これまで、朱載堉の楽律学と暦学は分離され研究される傾向にあったが、本報告では、彼の学術を「律暦合一」の観点から捉え、思想的連関を考察する。第一に、『律暦融通』(1581)の構造を明らかにし、彼の制作した暦の背景にある理想と理論を分析する。第二に、律暦を媒介する存在としての気に対する朱載堉の理解を、何瑋や王廷相の議論をふまえて考察する。第三に、朱載堉は、自らの理解する「朱熹の思想」に則り、楽律と暦の最も基礎的段階に、河図・洛書の数理を取り入れた。朱載堉はあくまで「朱子学者」として持論を展開するが、そもそも彼の理解する朱子学とは何か。朱熹と朱載堉の「数」に対する理解を中心に比較する。第四に、京房や劉歆など、先立つ律暦合一思想と朱載堉の差異を明確化する。

【報告者紹介】 田中有紀(たなか・ゆうき)氏は1982年生。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程在学。日本学術振興会特別研究員DC2。宋明思想史、特に音楽に関する思想を専攻。主要論文に「北宋雅楽における八音の思想—北宋楽器論と陳暘『楽書』、大晟楽—」(『中国哲学研究』23、2008)、「朱載堉の黄鐘論「同律度量衡」——累黍の法と九進法、十進法の並存」(『中国哲学研究』25、2010)など。

◇宋代における三国論の展開と背景について

田中 靖彦

【報告要旨】 三国時代や三国時代の人物に対する評価や議論(本発表ではこれを便宜上「三国論」と呼ぶ)は、唐代までは、強いて言えば曹魏を尊ぶものの、それにとらわれぬ多様な展開を見せるという傾向にあった。だがこの風潮は、宋代に大きな転換期を迎える。宋代の三国論の大きな特徴は、正統論と不可分の関係となったことにあるが、それでも後世主流となる蜀漢正統論がただちに隆盛を迎えたわけではない。本報告では、宋代の主要な論者による三国論について論じ、その特徴や位置づけを分析するとともに、同時代が三国論の過渡期であったことを確認する。また、南宋期における反曹思想の証左として著名な「曹操疑冢伝説」にも目を向け、伝説の形成過程と当時の情勢の関係について攷察する。

【報告者紹介】 田中靖彦(たなか・やすひこ)氏は1977年生。専攻は中国史学史。2011年、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程修了、博士(学術)。現在は恵泉女学園大学助教(特任)。主要業績として、『世説新語』の三国描写と劉義慶(『日本中国学会報』59、2007)、「澶淵の盟と曹操祭祀—真宗朝における「正統」の萌芽—」(『東方学』119、2010)ほか。

◇義和団事件後の清朝対日謝罪使の訪日——日本における活動とその意義を中心に
青山 治世

【報告要旨】本報告では、義和団事件後に清朝が日本に派遣した謝罪使を取りあげる。同謝罪使は、日本駐清公使館書記生の杉山彬が事件に際して北京永定門外で董福祥麾下の甘軍兵士に殺害されたことに対し、清朝皇帝が「惋惜之意」を伝えるため1901年に派遣した外交使節であり、その代表(欽差専使大臣)には那桐が任命された。使節の任務は謝罪儀礼のみにとどまらず、事件収束後に清朝内で始まりつつあった新政(変法)のための情報収集(視察)をも兼ねていた。本報告では、同謝罪使の活動について、①外交儀礼・謝罪儀礼(明治天皇への謁見・杉山への墓前祭)、②各地での訪問・視察(財政・警察・教育・産業施設が中心)、③日本側の政財界人(近衛篤磨・横浜正金銀行等)や各種団体(興亜団体・宗教団体等)との接触、④両国における報道、などの方面から検討を行ない、同謝罪使の清末外交上における位置や日中関係史上における意義についても考察していきたい。

【報告者紹介】青山治世(あおやま・はるとし)氏は1976年生。専攻は中国近代史。愛知学院大学博士(文学)。現在は日本学術振興会特別研究員PD(東京大学総合文化研究科)。主要論文は「清末における『南洋』領事増設論議—清仏戦争後の議論を中心に—」(『歴史学研究』800、2005年)、「領事裁判権を行使する中国—日清修好条規の領事裁判権規定と清朝在日領事による領事裁判事例を中心に—」(『東アジア近代史』13、2010年)。

◇清末における新式教育の発展と伝統士人

周 東怡

【報告要旨】清末中国の十年間に及ぶ「光緒新政」では教育改革が重点目標とされた。教育システム、カリキュラム、修業年限・授業時間などを詳細に定めた近代学制の公布は、それまで私塾において塾師が担ってきた科挙向けの教育方式に変革を迫った。新式学堂の成立や科挙の廃止は、生涯を科挙合格にささげる伝統士人に、大きな衝撃をもたらしたのである。基層伝統士人が残した日記を見ると、教育改革に不満を抱き、保守的姿勢をとる士人もいれば、積極的に新知識を吸収し、新式学堂の教師に転身しようとする士人もいたことがわかる。要するに、伝統士人は学堂設立と科挙廃止という二重の打撃に直面しながら、反発と受容の相反する姿勢を示したと言える。本報告は、清朝政府が新式教育を推進した際に伝統士人が示した複雑多様な反応を考察することにより、彼ら「民間」レベルの反応が新式教育の展開にもたらした影響を究明する。

【報告者紹介】周東怡(しゅう・とうい)氏の専攻は中国近代教育史。台湾国立師範大学歴史系卒。現在東京大学大学院総合文化研究科地域文化専攻博士課程在学。主要業績として「清末学制における「読経講経」科目の設置およびその内容について」(『アジア地域文化研究』第6号、2009年)がある。

◇左連研究の現代的意義

阿部 幹雄

〔報告要旨〕「左翼作家連盟」(以下「左連」と略する)は1930年3月に成立したが、共産党系だけではなく、左翼系作家が大団結する形になり、とりあえず「左連」を軸として近代中国文学は、そして「政治」と「文学」の関係は新たな段階へと進んでいったと一応はいえよう。「左翼」政治は国民党による全国統一後の新しい実践活動を求めていたし、「作家」は著作権保護といった権利の保障のための新しい職能団体を求めていた。これまで日本では「左連」については、理論的にも実証的にも数多くの研究がなされてきた。本報告ではそれら膨大ともいえる「左連」研究をふまえたうえで、「左連」が直面し、実際に介入していこうとしていた当時の「文学」の現場がどのような変化を遂げていたのか、また「左連」側は「文学」の現場をどのように変化させようとしていたのか、ということを考えていきたい。

〔報告者紹介〕阿部幹雄(あべみきお)氏は1975年宮城県生。専攻は中国近代文学。早稲田大学第一文学部中国文学専攻卒業、一橋大学言語社会研究科博士課程修了。現在、中央大学非常勤講師。主要論文、『革命文学』における文学言語観—李初梨『怎樣地建設革命文学』を中心に(『言語社会』第1号、2006年)、「魯迅の言語観と『抗い』をめぐって」(『現代中国』第82号、2008年)。

◇戦後台湾における「山地」行政の政治施策——対原住民政策の中核方針

松岡 格

〔報告要旨〕国民党政権が統治を行ってきた戦後台湾において、原住民居住地域「山地」に対してはどのような政策が採られてきたのか。対原住民政策のうち経済施策については、戦前の「理蕃」政策からの強い連続性が指摘されており、「山地」の資本主義経済体系下への組み込みが推し進められたと考えられる。それでは「山地」行政の中核たる政治施策はどうか。本報告では、行政区画の境界線の継承、その境界線に基づく分割行政の継承、「山地青年服務隊」という国民形成・国民動員を担う組織の存在、「山地」自治の単純化などいくつかの側面から、政治施策においても高い連続性を持っていたことを実証する。まとめれば、戦後の対原住民政策の中核方針も、戦前のそれと同じく国民形成を基礎とする地方化であったということである。

〔報告者紹介〕松岡格(まつおか・ただす)氏の専攻は地域研究および文化人類学。東京大学大学院総合文化研究科博士(学術)。現在、早稲田大学アジア研究機構・次席研究員。「白く塗りつぶす——コメに見る『理蕃』統治の経済施策とその影響」(『アジア・アフリカ地域研究』第9-2号、2010年)など台湾原住民社会に関する論文を複数発表している。

シンポジウム

都城の変貌：東アジアの9世紀～15世紀

2011年7月10日（日） 10:00～17:25 1番大教室

企画の趣旨

本シンポジウムの目的は、主として9世紀から15世紀にかけての東アジア都城の比較を通して、中国の社会と文化の実態を浮かび上がらせることである。同時に、中国都城と比較することで、東南アジアや朝鮮半島、日本列島の都城と歴史と文化の特色をあぶり出すこともめざしている。すなわち、この時期の中国大陸の都城である金中都・元大都・南宋臨安の歴史を、ベトナムのタンロン・ハノイや朝鮮半島の高麗開京、日本列島の平安京と比較することで、それぞれの地域の社会と文化の特色を新たな視角から浮かびあがらせることを、本シンポジウムは目的としている。

東アジアの都城を比較分析する従来の試みは、日本の律令制国家の形成期にあたる6世紀から8世紀にかけての時期や、中国大陸の明清交替期にあたる16、17世紀以後の時期を対象とする場合が多い。しかし、この間の時期である9世紀から15世紀にかけての時期の都城を比較するシンポジウムは余り例を見ないと思われる。この時期は、中国大陸でいえば、唐宋変遷を経てモンゴルの元王朝によって中国大陸が再統一され、明清交替期をむかえるまでの時期にあたり、現在に継承される中国の基層社会（社会の基礎をなす地域組織や人間関係）が形成される重要期である。

東南アジアでは、9世紀から15世紀にかけての時期は、15世紀半ばから17世紀にかけての「交易の時代」の前提をなしており、東南アジア各地域の伝統文化が形成されていく時期といわれている。朝鮮半島や日本列島においても、中国大陸や東南アジアと同じく、各地域の基層社会や伝統文化が形成されていく時期といえよう。

この時期をより大きなアフロ・ユーラシア大陸の歴史の中で考えてみると、世界宗教に根ざす複合的な国家や世界宗教圏が解体し各地域独自の社会伝統が創造されていく時期として、共通の要素をもっているように見える。すなわち、4世紀から8世紀までの時期は、遊牧民の移動を契機とする人間の移動とそれともなう農業地域と遊牧地域を包含する複合国家の形成期にあたり、アフロ・ユーラシア大陸にフランク王国や東ローマ帝国（ビザンツ帝国）、イスラーム帝国、吐蕃王国、隋唐王朝などが併存した時期であり、世界宗教圏（キリスト教圏・イスラーム教圏・仏教圏）がユーラシア大陸をおおい東西交通が盛行し始める時期である。これに対して、次の時期にあたる9世紀から15世紀の時期は、世界宗教圏が普及する以前の古典文化の「復興」運動が生じて世界宗教圏が解体し始め、各地域独自の文化圏が創造される時期といえよう。

9世紀から15世紀の時期を交通社会史の観点から眺めると、アフロ・ユーラシア大陸の交通幹線が内陸都市網から沿海都市網に拡大していく中で、各地域が水運と海運によって互に結びつきを強め、沿海部の都市網を軸に共通の消費文化が徐々に形成される時期である。同時に、普遍よりも固有を指向する各地域独自の文化が醸成されていく時期にもあたる。東アジアに海域圏が形成されて、中国大陸や朝鮮半島、日本列島が緊密に連結しだし、中国大陸から南アジアにいたる沿海都市の興隆とともに東南アジア世界が形成されていくのもこの時期のことである。

本シンポジウムは、この「近代一歩前」ともいえる9世紀から15世紀の時期の特色を、中国大陸の北と南、東南アジア、朝鮮半島、日本列島の地域国家の各都城の構造や文化を比較することで明らかにしようとする試みである。この時期を考える際に都城が問題を解く鍵の一つとなる理由は、当該時期のかかえる諸問題は国家組織の中核をなす都城の構造や文化に露呈されるからと思われるからである。同時に、都城は、異なる地域が共有する歴史の同時代性を最も敏感に体現する空間と場所でもある。換言すれば、本シンポジウムは、16世紀以後の世界経済圏に包み込まれる前の東アジア各地域の実態を都城に焦点をあてて探ることで、人類における近代形成の意味を再考する試みでもあるだろう。

報告要旨

午前の部 中国大陸—北の都・南の都— 10:00～12:00

報告1 金の中都から元の大都へ

渡辺健哉（東北大学）

〔報告要旨〕

西暦13・14世紀は、モンゴル族がユーラシア大陸の大半と北アフリカを一つに結びつけて支配した、世界史上でも画期となる時代であった。中華世界も元朝によって、はじめに中国北部、ついで江南が支配されるようになった。その元朝が国都に選んだ場所こそ、のちに「大都」と名づけられた現在の北京である。

北京地区に都市が置かれたのは、約3000年前にまでさかのぼることができる。そのうち金朝の貞元元年（1153）、海陵王による燕京遷都の実行により、中都と名づけられて史上初めて王朝の国都に定められた。しかしながら、中都是現在の北京の西南地区に当たるため、元朝の世祖クビライ（1215～1294）によって建設された大都こそが、現今北京のひな型となる。

本報告では、この金の中都と元の大都との関係について考える。具体的には、元代における中都の役割と機能に触れ、そしてこの二つの空間の間で官庁や人がどのように移動したのかについて考察したい。

報告2 南宋臨安の社会と空間

高橋弘臣（愛媛大学）

〔報告要旨〕

臨安は、建前上は行在でありながら、実質的には南宋の都であるという、建前と現実が乖離した都市であった。報告では、最初に臨安が南宋の実質的な都となる経緯について、南宋政権・宋金和議の成立と重ね合わせて論じ、秦檜を中心とする和平派が、和議を確定させるため都の建設・整備事業を推進したことを指摘する。次いで臨安の社会を構成する要素の中から主に下層民を取り上げ、その淵源や数、行政側の対策等を紹介する。また下層民対策には様々な問題点、不徹底な側面のあったことにも言及する。最後に臨安が実質的な都となり、様々な建造物・施設が増え、人口も急増した結果、都市空間がどのように変化したのかという点に対し、検討を加える。

報告3 18世紀以前のホアンキエム微高地

桜井由躬雄 (京都大学)

〔報告要旨〕

ハノイでもっとも古く都市化されたホアンキエム微高地上では、紅河軸と平行・直交する道が先行する。紅河平行路は高地間を結ぶ道であり、直交路は破堤地形の尾根を走っている。最古の紅河直交路はハンプオムで、李朝期に禁城/皇城東門の祥符門からハンヴァイ、ランオンが延伸されて、ハンプオムと交わり、東市が作られた。黎朝期には北のロンビエン高位部の開発が進み、紅河平行軸に洪福寺、婆沐寺、垂直線上に玄天観が建設された。紅河軸の中心的な道路がドンスアン線である。ハンガイ高位部ではドンスアン線の南端に花祿亭ができる。17世紀ケチョーを描いた絵では、トーリック河口など河岸からの導入路、マーマイなど紅河沿岸を南北に通る道路が出現している。李・陳・黎朝期に5~6度が禁城、皇城の軸角になった!

王権が措定した軸角は東西はドンスアン線と昇龍城内城東壁の間、北はバットダン/ハンボーより北に限定され、旧市街の面積の四分の一を占めるにすぎない。ハノイは圧倒的に庶民の力によって作られ、管理されたマチである。

報告4 高麗王朝の儀礼と開京

豊島悠果 (神田外語大学)

〔報告要旨〕

朝鮮半島に興亡した諸王朝は中国との外交関係を継続し、官僚制や法制、礼制といった王朝支配の根幹をなす制度において中国制の影響を受けつつ、国家体制の枠組みを形づくってきた。高麗時代はそれが一段と深化した時期といえる。本報告ではまず、高麗における王権儀礼の整備について、社会的、国際的背景とともに考察する。また儀礼の挙行空間であり、多くの支配層が居住してその文化や思想が反映されていたであろう、都開京の姿はどのようなものであったのか。宮城・皇城・羅城からなる開京の構造を概観した上で、宮城内の建物配置や、儀礼施設の位置比定に関する研究等を紹介する。近年、開京の構造を高麗の「皇帝国体制」の一環として捉える見解が提起されていることを考えても、中国および東アジア周辺諸国の都城との比較は必須の課題であろう。本シンポジウムの成果が、開京研究の大きな一助となることを期待する。

報告5 平安京における人的ネットワークの展開

京楽真帆子 (滋賀県立大学)

〔報告要旨〕

日本古代国家にとって最後の都城である平安京は、様々な都市文化をはぐくんだ。在地と切り離されて都城に集住した貴族たちは、「都市に生きる」という新たな課題に直面し、都市生活にふさわしい規範作りを行ったのである。

それは、新しい人的ネットワークの形成でもあった。従来の氏族、家族、官僚機構、主従関係など、個々の場面で、個別ばらばらに結ばれていた人間関係は、都市・平安京という場で相互に関連性を持ち始め、人的ネットワークとして展開することになった。こうして都市に張りめぐらされた人的ネットワークは、様々な側面での「都市化」を引き起こした。例えば、情報伝達の都市化は、物語の世界に都市文学を生むことになる。こうした意味で、平安京は、日本が初めて得た「都市」であった。

本報告では、貴族たちが行う「とぶらひ」という見舞い行為の分析を通して、平安京の都市社会を見ていきたい。

◆ シンポジウム報告者紹介

◇ 渡辺健哉 (わたなべ・けんや)

東北大学大学院文学研究科助教。博士(文学)。近年の研究テーマは、元の大都、元代の科挙、明治・大正期日本における東洋学の展開など。主な論著に、「元大都的宮殿建設(中文)」(『元史論叢』第13輯、2010年)、「内藤湖南によるモンゴル時代に関する史料の蒐集」(『中国—社会と文化』第25号、2010年)、「羅氏雪堂蔵書遺珍」所収「経世大典輯本」について」(『集刊東洋学』第103号、2010年)、「科挙制よりみた元の大都」(『宋代史研究会研究報告集第9集「宋代中国」の相対化』汲古書院、2009年)等がある。

◇ 高橋弘臣 (たかはし・ひろおみ)

愛媛大学法文学部人文学科教授。博士(文学)。専攻は中国宋・元代社会経済史。近年の研究テーマは南宋臨安の歴史と文化。主な論著に『元朝貨幣政策成立過程の研究』(東洋書院、2000年)、「南宋の国都臨安の建設—紹興年間を中心として—」(『宋代史研究会研究報告第8集 宋代の長江流域—社会経済史の視点から—』汲古書院、2006年)、「南宋臨安の下層民と都市行政」(『愛媛大学法文学部論集人文学科編』21、2006年)、「南宋臨安の三衙」(『愛媛大学法文学部論集人文学科編』26、2009年)、「南宋の皇帝祭祀と臨安」(『東洋史研究』69-4、2011年)等がある。

◇ 桜井由躬雄 (さくらい・ゆみお)

東京大学名誉教授、京都大学特任教授。文学博士、農学博士、名誉科学博士(ベトナム国家大学)。専攻はベトナム地域学、東南アジア史。近年の研究テーマは、ベトナム村落誌、ハノイ形成に関する地域学的研究。主な論著に、『東南アジア現代史 III ベトナム・ラオス・カンボジア(世界現代史7)』(石澤良昭と共著、山川出版社、1977年[新版、1989年])、『中国江南の稲作文化』(渡部忠世と共編、日本放送出版協会、1984年)、『東南アジア世界の形成(世界の歴史12)』(石井米雄と共著、講談社、1985年)、『ベトナム村落の形成』(創文社、1987年)、『ハノイの憂鬱』(めこん、1989年)、『緑色の野帖』(めこん、1997年)、『東南アジア史 1』(共編著、山川出版社、1999年)、『米に生きる人々』(集英社、2000年)、『東南アジア史 4 東南アジア近世国家群の展開』(編著、岩波書店、2001年)、『東南アジアの歴史』(放送大学出版会、2002年)、『前近代の東南アジア』(放送大学出版会、2006年)等がある。

◇ 豊島悠果 (とよしま・ゆか)

神田外語大学専任講師。博士(文学)。専攻は朝鮮史。近年の研究テーマは、高麗王朝の対外関係。主な論著に、「1116年入宋高麗使節の体験—外交と文化交流の現場—」(『朝鮮学報』210、2009年)、「高麗の宴会儀礼と宋の大宴」(『宋代史研究会研究報告第9集「宋代中国」の相対化』汲古書院、2009年)、「고려전기 后妃・女官 제도」(『韓国中世史研究』27、ソウル、2009年)等がある。

◇ 京楽真帆子 (きょうらく・まほこ)

滋賀県立大学人間文化学部教授。博士(文学)。専攻は日本古代史・女性史。主な論著に、『平安京都市社会史の研究』(塙書房、2008年)、『裏松固禪「院宮及私第図」の研究』(共著、中央公論美術出版、2007年)、『源氏物語』をいま読み解く2 薫りの源氏物語』(共著、翰林書房、2008年)等がある。